

上方

今と昔

山本爲三郎

上方今と昔



著者略歴

明治26年4月24日大阪市に生る。
父業を繼ぎ、米國に留學、その後
ビール事業に携わり、現在朝日麥
酒株式會社社長。

昭和三十三年三月十日 印刷
昭和三十三年三月二十日 發行

定價二九〇円

著者 山本爲三郎

發行者 車谷弘

印刷者 長久保慶一

發行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

万一落丁亂丁の際は
お買求の書店
又は發行所にて
お取換え致します

印刷 大日本印刷
製本 矢嶋製本

上方

今と昔

山本爲三郎

文藝春秋新社

挿 装
繪 釘

鍋 佐
井 野
克 繁
之 次
郎

目次

天	養	船	郊	ハ	分	阪	赤	お
井			外	イ			い	す
板	子	場	電	カ	限	僑	灯・	し
			車	ラ			青い	
							灯	
九	一六	二三	三〇	三七	四四	五一	五七	六三

ビ ー ル	ガ ラ ス	え べ っ さん	や と な	正 月	み そ か	宴 會	吉 凶	進 取	成 駒 屋	くらわんか船	うずら(半助)
-------------	-------------	-------------------	-------------	--------	-------------	--------	--------	--------	-------------	--------	---------

一四〇	一三五	一二八	一二二	一一五	一〇八	一〇二	九六	九〇	八三	七七	七〇
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----

寫眞

眞末

（著者近影）

秋

山

庄

太

郎

園遊會	一四六
平野水	一五一
新酒	一五九
天神祭	一六六
鯛	一七三
新聞と松竹	一八〇
關一さん	一八五
平生釵三郎さん	一九二
住友	一九八
大京阪神	二〇五
蹴	二二三

上方
今と昔

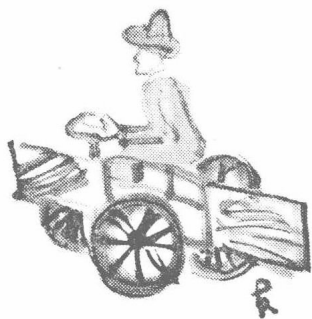
天 井 板

良賈は深く藏して……

大阪の富豪というものは質素だといわれる、すくなくとも表面は……。

大阪の町人の家では、晩はともかくも、朝と晝とは、番頭も小僧も女中も主人も、同じ物を食べる。場所は一緒のこともあり、すこしちがうにしても、同じ物を食べるのです。オヤツも同じ物を食べる。決して差別をしない。

めしだけはいくらでも食わせる。そうして正式に魚を食わすのは、一日と十五日となつてゐる。



平常も食わせることはあるが、正式には一日と十五日の二回、この時は尾頭つきを食わせる。

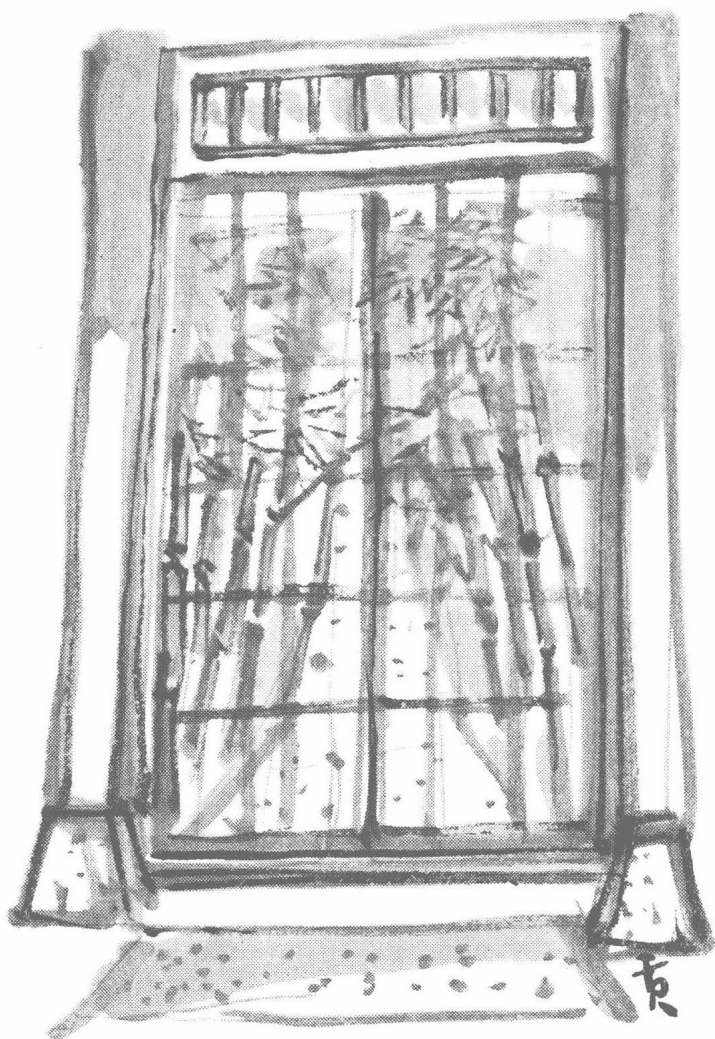
着る物は木綿物。ただし御主人は、木綿に似ている物、河内縞のように見えて、河内縞ではない、山繭とか結城とか、そういう物を着る。だから、裏には絹がついていたりするのです。

住いでもそうです。おもてを見ると、極めて簡素で、しもたやのように見える。おもての戸をガラガラとあけると、チンリン、チンリンと鈴が鳴る。パネのついた鈴が戸につけてあるのです。それから中に入ると、兩脇に竹が植つて、中央には石が敷きつめてある。その敷石を踏んでいくと、玄關がある。見ると、そこには衝立つたてがあつて、ちよつと花ぐらい活けてある。あるいは額がかかっている。いい感じだな、いい額だな、奥にはもう少し何かがあるだろう、という氣がする。だんだん奥へ入つてみれば、大した建築だということがわかる。

根津さんの書院

それで思い出すのは昭和の初め、根津嘉一郎さんが東京で家を建てるというので、深川へ天井板を買いにいったら、

一坪百圓までの天井板がありますけれども、それ以上のものは、大阪においでにならないとありま



せん」

と言われた。

そこで大阪へ行つて、西横堀にある、坪井善兵衛という店、これは有名な店ですが、そこへ天井板を買いにいった。

「八疊と六疊の書院を造りたい、唐紙表は景文、裏は是真（ともに四條派の畫家）の唐紙だが、天井にいい板を使いたい、どういう物がある？ 一番いいのを出してしろ」

根津さん、こう言つた。

東京では百圓止まりしかないといつたから、せいぜい二百圓も出したら、ステキなのがあるだろう、と思つたらしい。それはそうでしょう、社宅のような家ならば、坪五十圓で建てられた時代ですから……。

「どういふ杉もありますが、何がよろしい？ 薩摩杉をおみせしましょうか」

「おれはシラタつていう、白い肌の杉がほしい」

「それならば、實はケチなことなんですが、私どもには、よいのは五坪よりありません。悪いのが四坪あります。八疊と六疊ならどちらも一坪ずつ残ります」

「いや、兩方同じ天井にしたい」

そう言つたら、

「それはもつたいない。遺憾ながら私どもでは兩方はそろいません。がしかし、これでいいものでございますよ」

「ああ、そうか」

それからいろいろ話をして、

「これ、いくらだい」

と言つたら、

「坪が一方は八百圓で、一方は四百圓でございます」

大阪商人の土性骨

たつた一坪の天井板が八百圓、これにはさすがの根津さんも驚いたが、さりげなく、

「八百圓と四百圓と、どちらがうのか」

「いいほうがほんとうの値段で、こつちはちよつと悪いから半値です」

「これ、君、いつごろからあるんだ」

「さあ、知りません。私の先代からあるんですから、わかりません」

「そんなに賣れないとは、無駄な商賣があるものだな」

「いや、こういう商賣は道樂ですから、あなたからお思いになると無駄なんです。けども、これがほんとうにほしいという方もありますから、私どもこういう商賣で看板を出している以上、商賣冥利です」

「そうか。ところで、ぼくは八疊と六疊ほしいんだから、一坪ずつ餘るんだが……」

「餘していただいて結構です」

こう言つたら、そこは根津さんだ。

「君、一坪くらい餘つてもしょうがないんだろう。だから、半値に負けたまえ」

こう言つた。

「いや厘毛お負けできません。一坪でもお茶室にちゃんと使い途がございます。そうでなくても、私の家に祖先からあるものでございますから、見本に置いておきたい。餘らして結構でございます」

「ああ、そうか。時に、君の所は川つぶちだが、倉庫は木造だね。火事で焼けたら何んにもならんじゃないか」

「それはそうです」

「焼けたと思つたら、少しは負けてもいいじゃないか」

「それはそうか知れません。しかし、これはほんとうにほしいというお買手のあつた時にお賣りするものですから、こんな物をお買いになろうという方に、値切るような方は見えないんです。

天井を八百圓の板でご普請なさるような方は、高い安いじゃないんです。私どものほうでも、ソロバンを置いてみたら、いつ賣れるかわからんような物を何十年も置いて、火災保険をつけている、實に不經濟なものです。これで氣に入つたらお買いください。氣に入らなかつたら結構です」
こう言つた。これには根津さんも、一大阪の商人というのは、上性骨の太いやつだな。つて驚いてました。

こういう家を根津さんは、二萬何千坪、二區數町にわたる場所に建てたが、根津さんが亡くなつた時に、小林一三さんが、

「ほかの物はほしくないけど、山本君、この部屋だけはほしいね。天井はいいし、唐紙は景文と
是真だ。わしはこの部屋だけはほしい」

と、しみじみ言つておられた。まあ、その家も戦災で焼けてしまつたけれども。